

能「頼政」鑑賞のポイント

作者／世阿弥 季節／五月 所／山城国宇治
前シテ／老人 後シテ／頼政の霊
ワキ／旅の僧

能「頼政」は、『平家物語』をもとにした世阿弥の作で、旅の僧の前に頼政の霊が現れて在りし日を語る夢幻能の形式で上演される物語です。

【舞台は山城国宇治】

舞台となる宇治は『源氏物語』の宇治十帖で有名ですが、そのため「頼政」で前シテの老人（頼政の霊）が宇治の名所を教える場面では「小島が崎」「橘の小島」「柴舟」など、『源氏物語』ゆかりの言葉が出てきます。

【文武両道の老武者の風格と悲哀】

頼政は名門清和源氏の出で、平安時代末期の武将。勅撰和歌集に五十九首が掲載されるなど、和歌にも秀でた文武両道の人物です。源氏でありながら平治の乱では平清盛の側に与したにもかかわらず長らく不遇でしたが、老年によりやく従三位という最高位に昇進が叶います。しかしその後、高倉の宮（以仁王）に平家打倒を勧めるも計画が発覚し、宮とともに奈良へと逃れ、その途中の宇治の平等院で自決するという壮絶な人生を送っています。前場では老人の姿、後場では出家した法師武者の姿で登場しますが、その誇り高き風格と、無常の世の悲哀を感じさせる演技が見どころです。

【合戦の場面の緊迫感】

後場で、頼政の霊が宇治川を挟んだ激しい戦の様子や、筒井の淨妙、一来法師や田原の又太郎忠綱らの奮戦ぶりを語る場面は、この曲の最大の見所です。床几に座った頼政の霊は、足拍子や扇を使った激しい型で緊迫した様を演じます。それはまるで源平の合戦絵巻を見るかのようにですが、最後は一転して辞世の歌に込められた老武者の複雑な心境を吐露して終わります。

【専用の面と装束】

「頼政」というこの曲だけの専用の面が使われます。また「頼政頭巾」という特殊な被り物も合わせて着用します。法体であるため、通常の武将とは異なり、法被（広袖の衣）・半切（袴）といった武将としての勇壮さと、出家した法体という二つの側面をあわせ持ったこの演目固有の扮装となっています。